

平成28年度大学図書館職員短期研修に参加して

大上良樹

1 はじめに

大学図書館職員短期研修は、図書館勤務年数2年以上10年以下のものを対象とした、京都大学附属図書館および東京大学附属図書館主催、国立情報学研究所共催の研修であり、大学図書館等の活動を活性化するため、また、今後の図書館の企画・活動を担う要員となる上で必要な基礎知識・最新知識を修得することを目的として開催されるものである。

今回、私は10月4日(火)～7日(金)の4日間、京都会場(京都大学附属図書館)にて上田夏実氏とともに参加する機会を得た。研修の4日間のカリキュラムについては、以下の表1を参照願いたい¹⁾。

【表1】

京都大学	東京大学	時間	内容	講師等	講義資料/成果物
1日目					
		9:00-9:30		(受付)	
		9:30-9:45	15分	開講式	
		9:45-11:00	75分	大学図書館の現状と課題 [京都会場] 甲斐重武(京都大学附属図書館事務部長) [東京会場] 尾城孝一(東京大学附属図書館事務部長)	資料 Creative Commons: 表示-非営利-継承
		11:15-12:30	75分	大学図書館職員のスキルアップ法 井上昌彦(関西学院大学神戸三田キャンパス図書館メディア館 課長補佐)	資料 Creative Commons: 表示-非営利-継承
		13:45-15:00	75分	学術情報リテラシー教育の現状 須賀井 理香(東京大学情報システム部情報基盤課学術情報チーム(学術情報リテラシー担当) 係長)	資料 Creative Commons: 表示-非営利-継承
		15:10-15:55	45分	海外研修経験から見た大学図書館(1) 石山 夕紀(東京外国語大学総務企画部学術情報課 係長)	資料 Creative Commons: 表示
		15:55-16:40	45分	海外研修経験から見た大学図書館(2) 藤 順一(早稲田大学図書館利用者支援課)	資料 Creative Commons: 表示-非営利-改変禁止
		16:50-17:40	50分	[京都会場] 京都大学附属図書館見学 [東京会場] 東京大学新図書館計画の紹介	
		17:55-19:25	90分	情報交換会	

京都大学	東京大学	時間	内容	講師等	講義資料/成果物
2日目					
		9:30-12:20	170分	効果的なグループ討議法(講義) 岩田 好司(久留米大学外国語教育研究所長(教授))	資料 Creative Commons: 表示-非営利-改変禁止
		13:30-14:45	75分	大学図書館における目録実務とNACSIS-CIATの現状及び今後の構想 藤井 眞樹(一橋大学学術図書館学術情報課 目録情報係長)	資料 参考資料 Creative Commons: 表示-非営利-改変禁止
		15:00-17:30	150分	グループ討議 ※適宜休憩を含む	
3日目					
		9:30-10:45	75分	電子コンテンツのいま 森嶋 桃子(慶應義塾大学メディアセンター本部 電子情報環境担当)	資料 Creative Commons: 表示-非営利-改変禁止
		11:00-12:15	75分	Open Access: A Primer 林 豊(九州大学附属図書館eリソースサービス窓口ポシトリ係員)	資料 Creative Commons: 表示
		13:30-14:45	75分	学習/学修支援と大学図書館の役割 香海 沙織(筑波大学図書館情報メディアセンター基礎研究センター(教授))	資料 Creative Commons: 表示-非営利-改変禁止
		15:00-17:30	150分	グループ討議 ※適宜休憩を含む	

京都大学	東京大学	時間	内容	講師等	講義資料/成果物
4日目					
		9:30-10:15	45分	国立情報学研究所の学術コンテンツ事業紹介 細川聖二(国立情報学研究所学術基盤推進部学術コンテンツ課長)	資料 Creative Commons: 表示-非営利
		10:15-11:15	60分	グループ討議: 報告会(前半: 発表と質疑応答含む)	
		11:20-12:20	60分	グループ討議: 報告会(後半: 発表と質疑応答含む)	
		12:20-12:40	20分	講評 [京都会場] 甲斐重武(京都大学附属図書館事務部長) 川聖二(国立情報学研究所学術基盤推進部学術コンテンツ課長)	
		13:40-14:30	50分	グループ討議: 班別振り返り・修正作業	
		14:40-15:40	60分	グループ討議: 変更箇所を中心とした最終報告会(前半)	各班成果物(下野)
		15:45-16:45	60分	グループ討議: 変更箇所を中心とした最終報告会(後半)	
		16:45-17:00	15分	受講者同士の講評・意見交換	
		17:00-17:10	10分	閉講式	

【表1】のカリキュラムにあるとおり、本研修では、4日間にわたり11の講義を拝聴した。また、講義以外に43名の参加者が班別に分かれ、各班が選択したテーマについてグループ討議とその報告を行った。以下、本研修で特に印象深かった3つの講義とグループ討議・報告会について述べる。

2 「大学図書館職員のスキルアップ法」

講師は、'関西学院大学神戸三田キャンパス図書メディア館課長補佐 井上昌彦氏'で、「つながろう、気付こう、そして一歩踏み出そう！」というテーマの講義を拝聴した。

講師の井上氏は、図書館業界では著名な方で私自身も名前は聞いたことがあったが、実際に講義を聞くことは初めてであった。冒頭、「全員に10を届けるつもりはなく、分かる人に100を与えたい」という話でまずは圧倒され、そのあとも今まで聞いた講義とは一味も二味も違う内容であった。

その中でも私が印象に残った言葉がある。それは、「自分の成長は、社会の成長」である。自分自身が成長することは、自身のためだけではなく図書館の成長につながり、そのことがさらに大学の成長につながり、最終的には社会の成長にもつながるというお話を伺ったときには、これが「目から鱗が落ちる」ということかという感覚を覚えた。

また、この言葉以外にも、「講義を受ける前に講師のことを調べておく」「講義のあとは極力質問する」「勉強会参加の意義」等、ここでは書ききれないほどの、新たな気づきを与えていただいた言葉があった。この講義を初日に拝聴したことで、このあとの講義への取り組み方や意識が変わり、積極的に4日間の研修に取り組むことができた実感している。ちなみに、当日の講義資料は、国立情報学研究所サイトにて公開もされている。井上氏の講義を聞かれたことのない方は、一度ご覧いただければと思う。

最後に、ご参考として井上氏のブログ・TwitterのURLを記載しておく。ブログは100万アクセスを突破しているとのことであり、多くの方々に読まれているものである。こちらも、アクセスしてみたいかがだろうか。

- 図書館ブログ「空手家図書館員の奮戦記」
karatekalibrarian.blogspot.com/
- 「井上昌彦@空手家図書館員
(@karatelibrarian) Twitter」

<https://twitter.com/karatelibrarian?lang=ja>

3 「電子コンテンツのいま」

講師は、'慶應義塾大学メディアセンター本部電子情報環境担当 森嶋桃子氏'で、電子コンテンツの特徴から課題、今後についての講義を拝聴した。

今年度、雑誌担当として冊子体雑誌に係る業務(契約、発注、予算管理、支払処理、データ保守、利用統計等)を担っており、電子担当者とも連携し契約更新業務等を行っていたが、如何せん専門用語も多くなかなか理解し難い部分が多くあった。そうした状況下でもあったことから、基本中の基本からわかりやすく説明いただく機会を得ることができ、非常に有難かったと感じた。以下に、講義で学んだことを中心に電子コンテンツの概要をまとめておく。

(1) 特徴

提供されるのはアクセス権。また、冊子との主な違いは以下のとおり。

- ①保存スペース不要
- ②24時間どこからでも利用可
- ③利用統計取得可

(2) 契約モデル

契約条件には、「同時アクセス数」「リモートアクセス」「サイトの定義」等、様々な条件がある。また、主な契約モデルは以下のとおり。

- ①個別タイトル購読
- ②パッケージ契約 (Big Deal)
- ③アグリゲータ
- ④PPV (Pay Per View)
- ⑤買切

(3) コンテンツ提供

- ①電子ジャーナル
- ②電子ブック
- ③データベース

(4) 課題

- ①価格の上昇
→論文数増加、代替品が存在せず価格競争が成立しない、出版社の寡占化、為替変動、税金(リバースチャージ)
- ②図書費予算減による資料購入費減少
- ③パッケージ契約における制約
→購読タイトル(規模)維持、タイトル移管、契約中止後のアクセス保証問題

(5) JUSTICE の活動

JUSTICE とは、国立大学図書館協会（JANUL コンソーシアム）と公私立大学図書館コンソーシアム（PULC）が、参加館数を増やし出版社との交渉力を高めるため、2011年に統合した「大学図書館コンソーシアム連合」のことであり、主に以下の活動を行っている。

- ① 出版社との交渉
- ② バックファイル・人社系コンテンツの整備
→ NII-REO との連携
- ③ 電子リソース管理システムの共同利用
- ④ 電子リソースのアクセス保証
→ CLOCKSS
- ⑤ 職員の資質向上
- ⑥ 広報や情報収集

(6) 今後の電子コンテンツ

オープンアクセスが鍵

- ① 機関リポジトリ
- ② APC（Article Processing Charge）/
オフセットモデル
- ③ SCOAP3
- ④ Open Access 2020

また、森嶋氏の講義は、時折冗談やオフレコの話等も交えながら行われ、プレゼンテーションの進め方としても大変参考になる講義であった。

4 「効果的なグループ討議法」

講師は、'久留米大学外国語教育研究所長 岩田好司氏' で、カリキュラム中のグループ討議を行う前に、「協同の観点から、効果的なグループ討議の仕方、させ方（ファシリテーション）を学び、実践することを趣旨とし、グループワークを交えて講義は進められた。

この講義とグループワークは約3時間であったが、あっという間に時間が過ぎていった。というのも、ファシリテーターとしての岩田先生の講義の進め方はユーモアも溢れつつ、聞いている参加者を飽きさせない工夫が随所にちりばめられていたからである。この講義を聞いたことで、グループ討議への不安は、私だけでなく多くの研修参加者も和らいだものであると思う。

以下に、研修の詳細スケジュールと討議スキル・工夫（技法）について記載する。

(1) スケジュール

- ① グループ討議の環境作り（30分）
- ② 協同によるグループ討議（20分）
- ③ 協同による意思決定（25分）
- ④ グループ討議の実践（50分）

(2) 協同を促進する工夫（技法）

- ① 傾聴とミラリング
- ② ラウンド＝ロビン（順番に話そう）
- ③ シンク＝ペア＝シェア
- ④ 好きなだけ読み、いっしょ読み
- ⑤ コンセンサス法（納得法）
- ⑥ TTT（質問タイム）
- ⑦ アフィニティ＝グループピング

また、2の井上氏同様、当日の講義資料は、国立情報学研究所サイトにて公開されているので、技法の詳細等については、資料を確認願いたい。

5 グループ討議・報告会

グループ討議は、事前に設定されたテーマごとに班分けされており、そのメンバーで報告会に向けた資料作成を行い最終日に発表を行うものであった。今回の議題は、①海外調査研修計画を企画立案する。②多様な学術情報の発見と活用を支援するツールを考える。③図書館と学内他部門および教員との連携による課題解決を考える（教育・学習支援）の3つであり、私は②を選択した。

なお、効果的な討議を行うため、事前学習を行った上での、発言要旨も研修前に提出しており、後日所属する班のメンバーのものがメールで送付され、事前に確認しておくという事前課題があったことも補足しておく。

討議は、最初にファシリテーター、記録者、発表者を決めるところからスタートしたのだが、なかなかファシリテーターが決まらなかったこともあり、不慣れではあるが、これも経験と思い、私が立候補し、他のメンバーにもスライド作成や書記、発表といった何かしらの役割をそれぞれにお願いすることとした。

グループ討議は、テーマも難しく時間内にまとめられるか不安が多かったが、班のメンバーの協力のもと、岩田先生の講義を思い出しつつ取り組み、実際に班のメンバーと討議し一つの成果物まで作成でき、それなりの達成感も得ることができた。こうし

た経験は日常の業務を行っているだけでは決してできない経験であり、研修の醍醐味の一つであろう。

また、グループ討議報告では、他の班の発表を聞くことで、自分や自分の班では思いつかなかったアイデアや考えを知ることができた。さらに、今までのグループ発表と異なっていたのは、発表が2回あったことである。これは、最終日の午前中に報告したあとそれぞれの班ごとに講師の先生方の講評をいただくのだが、そのことを踏まえ、再度修正し、午後からその部分を中心にもう一度報告するというものである。通常であれば講評をいただいて終了のところ、出された疑問点や改善点を再考することで、自分たちの発表内容を深めることができた実感している。このプログラム構成は斬新なもので、今後継続されることが望ましいのではと考える。

なお、今回の研修での各班の発表内容については、京都大学学術情報リポジトリ「KURENAI 紅」で公開（国立情報学研究所サイトの各班成果物 からリンクあり）されているので、興味のある方は、ご覧いただきたい。

6 研修を終えて

今回の研修に参加し、実に多くのことを学べたと実感している。以下、箇条書きにて記載する。

- (1) 図書館業務に関する知識を体系的に習得することができた。
- (2) 班ごとのグループ討議の中で、司会（ファシリテーター）を担当し、班内での意見をまとめる難しさを実感するとともに、限られた時間内で一つの成果物を作り上げたという達成感を感じることができた。
- (3) 情報交換会やku-librarians 勉強会、有志で開催された懇親会に参加したことで、国立大学、私立大学という枠組みを超えた他大学職員との人的ネットワークを形成するきっかけづくりができた。

こうした研修に参加することで得られるものは、知識はもちろんのこと、上記(3)で述べたような人的ネットワークの部分も大きいと感じた。特に、国立大学の図書館員の方は比較的若い方が多く、意欲の高い人が参加しており、少し年の離れた私にも積極的に名刺交換にこられたことは印象深い。本学図書館においても、若い世代の方には是非とも積極的に本研修に参加し、多くのものを学んでほしい。

また、多くの参加者が業務多忙の中、各図書館が抱えている課題に前向きに取り組み、勉強会をはじめ業務外での自己研鑽に精力的に励んでいることを知り、大いに刺激を受けた。

現在、図書費予算のことをはじめ、国立私立問わず、大学図書館が抱えている問題は少なくない。そうした中で、「どうすれば問題を解決できるか、何をどこまでやるのか、やれるのか、やらねばならないのか」を一人一人が考える必要があると実感している。そして、チーム一丸となり問題解決に前向きに取り組んでいく姿勢が大切ではないか。

最後に、「大切なことは、たゆまず学ぶこと」「やると決めたことを、覚悟を決めて行うこと」という九州大学附属図書館の林豊講師の言葉を胸に刻み、読書や研修への参加をはじめとした自己研鑽を怠ることなく、日々の業務にも取り組んでいきたい。

以上

注

- 1) 国立情報学研究所サイト 平成28年度カリキュラム
<http://www.nii.ac.jp/hrd/ja/librarian/h28/index.html>

参考文献

1. 日本図書館情報学会研究委員会編『電子書籍と電子ジャーナル』勉誠出版 2014

（おおがみ よしき 図書館事務室）